

## 【論文】

# 現代日本漢語における 唇内入声音の促音化について

舘野 由香理

Consonant Gemination of Shinnai Nissho-on in Modern Sino-Japanese

TATENO, Yukari

**要旨：**中国語の音節構造はIMVF/Tで示されるのに対し、日本語はCVのような単純な開音節構造であるため、中国語原音を日本語に受け入れる際に、様々な問題が発生した。韻尾のうち、入声音は原則的に狭母音をつけて開音節化させたが、唇内入声音の受け入れ方は複雑である。例えば、「習シュウ（シフ）」のように語尾が「ーウ（ーフ）」となるもの、「湿シツ」のように「ーツ」となるもの、「雑ゾウ（ザフ）・ザツ」のように「ーウ（ーフ）」と「ーツ」の2通りあるものの3パターンの写され方が存在する。このうち「ーツ」は特殊であり、これは無声子音の前で起きた促音によるものとされる。小論では、現代漢語における唇内入声音の促音化について分析し、それをもとに歴史的事態についても推測する。合わせて、字音（漢字の音）と語音（漢語の音）の関係を明らかにしたい。

**キーワード：**現代漢語、唇内入声音、促音化、字音、漢和辞典

## 0. はじめに

日本の漢字は中国から伝えられたものであり、漢字とともに当時使われていた漢字の音（字音）も伝えられた。しかし、中国語の音節構造はIMVF/Tで示されるのに対して、日本語はCVのような単純な開音節構造であるため、鼻音韻尾-m,-n,-ŋや入声韻尾-p,-t,-kのように子音韻尾をもつ中国語原音を日本語に受け入れる際、それをどのように写すかというのは大きな問題の

ひとつとなった。入声韻尾に関しては、舌内入声音-tや喉内入声音-kは狭母音(i,u)をつけて開音節化させ、

舌内入声音-t      一イチ   吉キチ   発ハツ   筆ヒツ …      一チ・一ツ

喉内入声音-k      色シキ   石セキ   国コク   読ドク …      一キ・一ク

のように写された。

しかし、唇内入声音-pは単純ではない。具体的には、

1) 協キョウ (ケフ)      獵リョウ (レフ)      一ウ (一フ)

2) 湿シツ      接セツ      一ツ

3) 雑ゾウ (ザフ)・ザツ   執シュウ (シフ)・シツ      一ウ (一フ)・一ツ

のように写される。1) のように語尾が「一ウ (一フ)」となるもの、2) のように「一ツ」となるもの、さらに3) のように「一ウ (一フ)」と「一ツ」の2通りあるものの3パターンの写され方が存在する。語尾を「一ウ (一フ)」のように狭母音-uをつけて開音節化させるのは、舌内入声音や喉内入声音と同じであるが、「一ツ」は特殊である。これは促音が変化したものとされる。

入声音-p,-t,-kの促音化に関していえば、舌内入声音-tは、

出：出發シュツパツ   出典シュツテン   出産シュツサン   出家シュツケ …

のように、日本語の無声子音p(h),t,s,kのどれが後接しても例外なく促音化し、喉内入声音-kは、

国：国宝コクホウ   国体コクタイ   国産コクサン || 国会コクカイ …

のように、喉内入声音と同じ無声子音kが後接する場合に限り促音化するといったように、舌内入声音と喉内入声音の促音化には規則性が認められる。それに対して、唇内入声音-pの場合は、

立：立派リッパ   立体リッタイ   立春リッシュン   立憲リッケン …

のように、無声子音が後接して促音化する唇内入声音も存在するが、

習：習癖シュウヘキ   習得シュウトク   習作シュウサク   習慣シュウカン …

のように、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声音、さらに、

現代日本漢語における唇内入声音の促音化について

合：合併ガッペイ 合体ガッタイ 合奏ガッソウ

合法ゴウホウ 合沓ゴウトウ 合成ゴウセイ 合格ゴウカク …

のように、無声子音が後接して促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声音も存在し、唇内入声音の促音化の現れ方は複雑といえる。

本稿では、現代漢語における唇内入声音の促音化について分析し、それをもとに歴史的事態についても推測する。合わせて、字音（漢字の音）と語音（漢語の音）の関係を明らかにしたい。

## 1. 唇内入声音に関する従来の指摘（先行研究）

唇内入声音の写され方について、小松（1956：68）は、

中古音においてimplosiveの-pを末音に持っていた、いわゆる唇内入声音は、現行通用字音において

甲[ko:]・臘[ro:]・乏[bo:]・合[go:]

業[gjo:]・涉[fo:]・泣[kju:]・入[nju:]

のように表わされ、…中略…

一部には「接」「撰」「湿」「蟄」「颯」「拉」のように、舌内入声に合流して、唇内入声のおもかげを全く留めぬ文字や、立、雑、執のように、ある特定の語結合に、わずかにその痕跡を留めるに過ぎぬものがあり、また、本来の字音は長音化した韻尾を持っていても、或る特別の場合に促音化して読む

（法）法度 法相宗 法体 法被

の如き字もかなりあって、甚だ複雑である。

と指摘している。さらに、林（1982：326）は「唇内入声音の現れ方はそれほど単純ではない」と唇内入声音の写され方の複雑さを指摘したうえで、

唇内入声字の多くは、平安時代に固有の日本語の第二音節以下で起っ

た $\Phi u > u$ の変化を反映して、

$-p > -p^u > -\Phi u > -u$

のような変化をたどり、その結果「ーウ」と書かれるようになって、韻尾-uおよび-ŋを持つ諸字との識別を失ったが、あとに無声の子音が続く場合には促音化を起しやすかったために、そのような結合頻度の高い一部の唇内入声字は、鎌倉時代以後、促音や舌内入声と同じ「ツ」の仮名で表わされることが多くなり、結局その字の字音として「ーツ」のかたちの方が一般化してしまったのである。

と結論をしている。「あとに無声の子音が続く場合には促音化を起しやすかった」という点において、現代漢語ではどの程度の唇内入声音が促音化を起しているのか、まずはその実態を明らかにしたい。

## 2. 現代日本漢語における唇内入声音の促音化

### 2. 1. 調査の対象と範囲

唇内入声音の促音化の調査・分析には、現代の漢語として一定の頻度数がある漢字を選ぶことにする。具体的には、「常用漢字表」の2,136字と「表外漢字字体表」（1,022字から常用漢字と重複する196字を除いた826字）に載せられている合計2,967字を調査の範囲とし、このうち『広韻』に収録されている唇内入声音77字の中から、無声子音が後接する漢語のある唇内入声字を対象とする<sup>1)</sup>。漢語の調査に使用するの以下の漢和辞典である。

小川環樹ほか編（1994）『角川新字源（改訂版）』角川学芸出版

小林信明編（2003）『新選漢和辞典（第七版）』小学館

藤堂明保・加納喜光編（2005）『学研新漢和大字典』学習研究社

## 2. 2. 調査結果

上記の漢和辞典に収録されている唇内入声音77字について、無声子音が後接した場合、促音化するかしらないかについて調査した。結果は表1のとおりである<sup>2)</sup>。

表1 無声子音が後接する唇内入声字

区 分	字数	割合	漢字（唇内入声字）
① 促音化しない唇内入声字	49字	74.2%	厭鴨凹押汲及吸泣急級給怯 依脇頰協峽挾狭脅業蛤闇劫 葺輯拾習襲汁洪妾摺涉疊挿 帖喋貼諫沓搭答踏乏葉笠粒 獵
② 促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声字	11字	16.7%	恰甲合雜執集塔入納法拉
③ 促音化する唇内入声字	6字	9.1%	圧湿十接撰立
④ 漢語がない唇内入声字	11字	—	扱蓋笈莢鈇甘睫囁噤喋捻

無声子音が後接すると規則的に促音化する唇内入声字は、③のように僅か9.1%（6字）で全体の一割にも満たない。それに対して、①のように無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字（74.2%・49字）や、②のように促音化する場合としない場合とが共にある唇内入声字（16.7%・11字）のほうが圧倒的に多いことが分かる。たしかに有声子音が後接して促音化する唇内入声字は存在しないので、その限りでは「あとに無声子音が続く場合には促音化を起しやすい」という従来の解釈は誤りではないが、無声子音が後接する唇内入声字が無条件に促音化するわけではない以上、促音化する条件が問題となる。では、表1①②③の合計66字には、促音化する場合と促音化しない場合とで、どのような条件の違いがあるのか、まずは韻類から検討したい。

### 3. 唇内入声音の促音化の条件

#### 3. 1. 韻類との関連

唇内入声音の促音化の条件について、韻目別に分類すると、表2のようになる。

表2 韻目別に分類した唇内入声字

摂	韻目 <sup>3)</sup>	等	促音化しない 唇内入声字	促音化する場合と しない場合とが共 にある唇内入声字	促音化する 唇内入声字
深	緝[iəp]	Ⅲ甲	葺輯拾習襲汁笠 粒	執集入	湿十立
	緝[īəp]	Ⅲ乙	汲及吸泣急級給 渋	——	——
咸	合[əp]	I	蛤閣沓答踏	合雜納拉	——
	盍[ap]	I	搭	塔	——
	洽[əp]	II	凹峽狹挿	恰	——
	狎[ap]	II	鴨押	甲	庄
	葉[iäp]	Ⅲ甲	厭妾摺涉葉獵	——	接撰
	業[īɤp]	Ⅲ乙	怯脇脅業劫	——	——
	乏[ī*ɤp]	Ⅲ乙	乏	法	——
帖[ep]	IV	俠頰協挾疊帖喋 貼諫	——	——	

表2を見ると、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字は、唇内入声音が属する深摂・咸摂のすべての韻目に存在している。一方、促音化する唇内入声字は、緝(甲)・狎・葉(甲)韻に限られている。この3つの韻目の主母音に着目するとə, a, äのように非奥舌的(前舌・中舌)であることが分かるが、前舌・中舌的であることが促音化する条件にはならない。なぜなら、緝(甲)・狎・葉(甲)韻には促音化しない唇内入声字も存在するからである。

促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字は、緝(甲)・合・盍・洽・狎・乏(乙)韻に存在する。勿論、促音化する場合としない場合とがあるこれらの諸字から、促音化に関する条件は導き出すことができない。

緝(乙)・業(乙)・帖韻には、促音化する唇内入声字が存在しないばかりか、促音化したりしなかったりする唇内入声字も存在せず、すべての唇内入声字が促音化しない。この3韻の主母音に関しても、促音化する唇内入声字が属する韻や促音化したりしなかったりする唇内入声字が属する韻と異なる特徴的事実は認められない。

特に緝韻においては、Ⅲ等甲類は、促音化しない唇内入声字のほかにも促音化する唇内入声字や促音化したりしなかったりする唇内入声字が存在するのに対し、Ⅲ等乙類は、全ての唇内入声字が促音化しない。同じ韻目でも促音化したりしなかったりする。

以上のことから、唇内入声音が促音化するしないに関しては、韻目の差が認められない。韻類との関係は認められないので、次は漢字ごとに検討する。

### 3. 2. 後接する無声子音との関連

検討するにあたっては、先にあげた3種の漢和辞典に収録されている全ての漢語を考察の範囲とする。

表の縦列には、字音の第1字目を五十音順に配列(括弧内には歴史的仮名遣いを示す)し、横列には、後接する日本語の無声子音p(h),t,s,kを配列する。

最初に、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字を掲げる。

該当する全49字について、すべての漢語を示すのはスペースが許さないなので、各字音につき漢字は1字を挙げるにとどめ、漢語も1例のみ示す。例えば、字音「キユウ(キフ)」には「汲・及・吸・泣・急・級・給・脅」が

あるが、ここでは「給」だけを示し、「給」の漢語（後接の子音sの場合）には、「給食・給水・給足」があるが、ここでは「給食」のみ示すこととする。

表3 無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
オウ (アフ)	押	押班オウハン		押収オウシュウ 他2	押券オウケン 他2
キュウ (キフ)	給	給費キュウヒ 他2		給食キュウシヨク 他2	給金キュウキン 他4
キョウ (ケフ)	協	協比キョウヒ 他2	協調キョウチョウ 他2	協賛キョウサン 他6	協会キョウカイ 他4
ギョウ (ゲフ)	業		業地ギョウチ	業績ギョウセキ	
コウ (コフ)	閣				閣下コウカ 他1
ゴウ (ゴフ)	業	業報ゴウホウ 他1		業障ゴウシヨウ	業火ゴウカ 他3
シュウ (シフ)	習	習癖シュウヘキ 他1	習得シュウトク 他1	習性シュウセイ 他7	習慣シュウカン 他2
ジュウ (ジフ)	渋		渋滞ジュウタイ		
ショウ (セフ)	妾	妾婦ショウフ 他1	妾宅ショウタク	妾出ショウシュツ	
ジョウ (デフ)	暈	暈峰ジョウホウ	暈重ジョウチョウ 他1	暈嶂ジョウシヨウ 他2	暈句ジョウク 他3
ソウ (サフ)	挿			挿釵ソウサイ	挿花ソウカ 他1
チョウ (テフ)	諜	諜報チョウホウ	諜知チョウチ 他1	諜者チョウシヤ	諜記チョウキ 他1



現代日本語における唇内入声音の促音化について

トウ (タフ)	踏	踏破トウハ 他2	踏踏トウトウ	踏襲トウシュウ 他4	踏歌トウカ 他2
ボウ (バフ)	乏		乏頓ボウトン		乏匱ボウキ
ヨウ (エフ)	厭	厭伏ヨウフク	厭翟ヨウテキ		
リュウ (リフ)	粒			粒子リュウシ 他1	
リョウ (レフ)	獵	獵夫リョウフ		獵師リョウシ 他2	獵奇リョウキ 他7

※下線部は2つ以上読み方がある唇内入声字である。

表3の唇内入声音は、無声子音p(h),t,s,k全てにわたってその前では促音化しないので、後接子音に関する促音化の条件については、特記すべき点を見出せない。

ちなみに、各字に何種類の無声子音が後接するかについて見ると、「渋」のように特定の無声子音しか後接しない漢字もあれば、「乏」や「獵」のように2種類3種類の無声子音が後接する漢字、「習」のように4種類全ての無声子音が後接する漢字もある。無声子音の後接の仕方には違いがあるが、全体としてみると、特定の無声子音しか後接しないために促音化が起きないといった事実は見出せない。

以上のことから、表1①の49字は後接の子音如何にかかわらず、促音化はしないことが確認できる。

次に、無声子音が後接したために規則的に促音化している唇内入声字について検討する。

該当する漢字6字はすべて掲げるが、漢語は1例のみを示すにとどめる。

表4 無声子音が後接して促音化する唇内入声字

字音	漢字	後接の子音			
		p(h)	t	s	k
アツ	圧	圧迫アツパク 他2	圧倒アツトウ	圧勝アツショウ 他8	圧巻アツカン
シツ	湿	湿布シツプ	湿地シツチ	湿疹シツシン 他1	湿気シツケ 他1
ジュウ (ジフ)	十 <sup>4)</sup>	十方ジツポウ 他1	十哲ジツテツ 他2	十秋ジツシュウ 他4	十戒ジツカイ 他2
セツ	接	接吻セツブン 他1	接待セツタイ 他2	接戦セツセン 他5	接客セツキヤク 他4
	摂		摂津セツツ 他1	摂取セツシュ 他3	摂関セツカン 他2
リツ	立	立派リツパ 他5	立体リツタイ 他5	立春リツシュン 他9	立憲リツケン 他3

これらの6字のうち、「圧・湿・接・摂・立」の字音は「ーツ」となるのに対し、「十」には「ーツ」の形（「ジツ」）が字音として認められていない。現に『学研新漢和大事典』を見ると、呉音には「ジュウ（ジフ）」、漢音には「シュウ（シフ）」が挙げられているのに対して、「ーツ」に相当するものは慣用音として認められている「ジツ」だけである。ちなみに語例には「十哲（ジツテツ）」「十戒（ジツカイ）」などが取られている。「十 ジュウ（ジフ）」は数詞として独立した用法を持っており、おそらくそれが字音として定着していたために、実際には「ジツ」のような促音化した形があるのに、「ジツ」という字音に昇格できなかつたものと考えられる。なお、一般に通用している漢語には「十回（ジツカイ・ジュツカイ）」「十周（ジツシュウ・ジュツシュウ）」「十分（ジツブン・ジュツブン）<sup>5)</sup>」のように「ジツ」のほかに「ジュツ」となる語形も存在する。これは「ジュウ（ジフ）」形の影響によるものと考えられる。

表4の6字のうち、「摂」を除く「圧・湿・十・接・立」は、後接する無声

### 現代日本語における唇内入声の促音化について

子音p(h),t,s,kすべてに漢語が存在し、どのような子音が後接しても促音化する。「摂」はt,s,kが後接する場合のみ漢語が存在する。主母音の特徴に着目すると、「湿・十・立」が-i、「接・摂」が-e、「圧」が-aである。

表3の促音化しない唇内入声字にさかのぼって見ると、促音化しない字の主母音は奥舌の非広母音-o,-u-であり、それ以外の-i,-e,-aは含まれないことが分かる。促音化するか否かについては、促音化を生じる直前の母音が関係しているかもしれない。

### 3. 3. 前接の主母音との関連

表3と表4に掲げた唇内入声字の主母音についてまとめたものが図1である。

図1 現代漢語における促音化する字と促音化しない字の主母音

i …	湿十立	}	促音化する
e …	接摂		
a …	圧		
o …	押妾闇など	}	促音化しない
u …	給習粒など		

図1は、唇内入声音が促音化する場合としない場合の条件が、前接の主母音にあることを示している。しかし、これは現代仮名遣いでのみ認められる条件であり、歴史的仮名遣いで見ると事情が異なる。

まず、図2のように促音化する唇内入声字の主母音が-i,-e,-aである場合には、現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとで違いが見られない。すなわち、主母音が-i,-e,-aである場合には、現代仮名遣いでも歴史的仮名遣いでも促音化する。

図2 促音化する唇内入声字の主母音

歴史的仮名遣い	現代仮名遣い			
i	→	i	i → i	リフ → リツ 立
e	→	e	e → e	セフ → セツ 接撰
a	→	a	a → a	アフ → アツ 庄

それに対し、促音化しない唇内入声字の主母音は、図3のように現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとで違いが見られる。すなわち、現代仮名遣いでは奥舌の非広母音-o,-u-であるが、歴史的仮名遣いには-o-のほか-i,-e,-a-も認められる。

図3 促音化しない唇内入声字の主母音

歴史的仮名遣い	現代仮名遣い			
i	→	o	i → u	キフ → キュウ 給泣急など
e	→	o	e → o	セフ → ショウ 妾摺渉など
a	→	o	a → o	アフ → オウ 押凹鴨など
o	→	o	o → o	コフ → コウ 闇劫蛤など

「→」で示したように、唇内入声字は促音化しない場合、歴史的仮名遣いの-i-は現代仮名遣いで-u-となり、同じく-e,-a,-o-は-o-となる。主母音-u-は歴史的仮名遣いには存在しないが、これは唇内入声字には中国語の母音を-u-で写しとるものが存在しなかったためである。

現代仮名遣いの-u-は-iΦuが拗音化によってju:となった結果である。

図2と図3から次のことが分かる。歴史的仮名遣いで主母音-e,-a-をもつ唇内入声字について見ると、促音化する場合は、現代仮名遣いと歴史的仮名遣いとの違いが見られないのに対し、促音化しない場合は、歴史的仮名遣いの-e,-a-が-o-に変化している。このo化は、中国語音の日本字音化に、日本語音の変化が重なって、

現代日本語における唇内入声音の促音化について

-ep > -epu > -eΦu > -eu > -o:

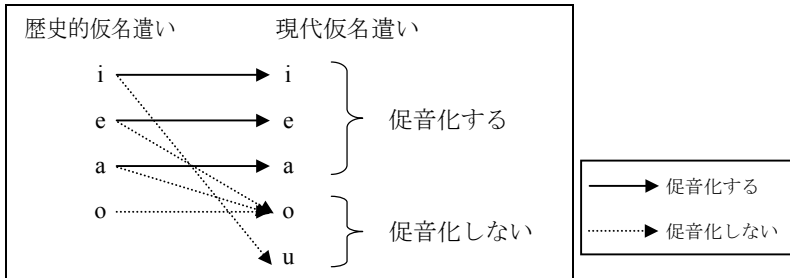
-ap > -apu > -aΦu > -au > -o: > -o:

のような変化を遂げた結果だから、現代仮名遣いの-e-, -a-は、促音化によって元の母音が保存されたと考えるべきである。

なお、歴史的仮名遣いの主母音-o-は、現代仮名遣いでもそのままである。

主母音は促音化の条件にはならないが、促音化する唇内入声字は元の主母音を保存し、促音化しない唇内入声字は拗音化や長音化に伴う母音変化を起こしたために、現代漢語では、図4のように促音化と主母音との間に相関性が生じている。

図4 促音化する字と促音化しない字の主母音



#### 4. 唇内入声音の字音と語音

##### 4. 1. 慣用音としての「ーツ・ーツ」

最後に、無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字を掲げる。

該当する漢字11字はすべて掲げるが、漢語は表3と表4と同じように1例のみを示すにとどめる。

表5 無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある

唇内入声字（上段：促音化しない漢語，下段：促音化する漢語）

字音	漢字	後接の子音			
		[-h/-p]	[-t]	[-s]	[-k]
コウ (カフ)	恰				恰好コウコウ 他1
		恰幅カフク			恰好カフコウ
	甲	甲兵コウヘイ 他1	甲宅コウタク 他2	甲子コウシ 他4	甲殻コウカク 他6
			甲冑カッチュウ	甲子カッシ	
ゴウ (ガフ) (ゴフ) カフ/ガッ	合	合法ゴウホウ 他7	合沓ゴウトウ 他3	合成ゴウセイ 他11	合格ゴウカク 他15
		合併ガフペイ 他4	合体ガフタイ 他2	合奏ガフソウ 他10	
ゾウ (ザフ) ザツ	雜	雜兵ゾウヒョウ		雜炊ゾウスイ 他2	雜巾ゾウキン 他1
		雜筆ザフピツ 他7	雜多ザフタ 他6	雜草ザフソウ 他25	雜貨ザフカ 他12
シュウ (シフ)	集	集配シュウハイ 他1	集注シュウチュウ 他5	集成シュウセイ 他4	集解シュウカイ 他9
			集注シツチュウ 他1		集解シツカイ
シュウ (シフ) シツ	執	執紼シツフツ	執着シュウチャク	執心シュウシン	
		執筆シツピツ 他2	執刀シツトウ 他2	執策シツサク 他3	執権シツケン 他2
トウ (タフ)	塔		塔頭トウトウ 塔頭タツチュウ	塔勢トウセイ	
ニュウ (ニフ) ジュ	入	入府ニュウフ 他2	入党ニュウトウ 他6	入手ニュウシュ 他13	入閣ニュウカク 他14
			入唐ニットウ	入声ニッショウ	入魂 ジッコン/ジュッコン

現代日本漢語における唇内入声音の促音化について

ノウ (ナフ) ナツ	納	納付ノウフ 他4	納徴ノウチョウ	納采ノウサイ 他2	納期ノウキ 他13
			納豆ナットウ 他1	納所ナツショ	
ホウ (ハフ) ハツ ホツ	法	法服ホウフク 他2	法廷ホウテイ 他10	法則ホウソク 他13	法界ホウカイ 他13
		法被ハッピ	法度ハット 他3	法相ホッソウ 他5	法華 ホツケ/ホケ 他2
ロウ (ラフ) ラ ラツ	拉		拉丁ラテン 他1	拉薩ラサ 他2	拉朽ロウキュウ 他1
			拉致ラッチ	拉薩ラッサ	

※下線部は読み方が促音化する場合と促音化しない場合が共にある漢語を示す<sup>6)</sup>。

表5について、無声子音が後接して促音化する場合の主母音を見ると、図5のようになる。

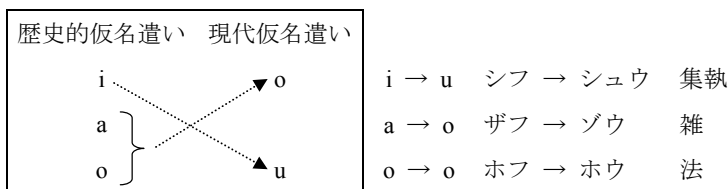
図5 表5より促音化する場合の主母音

歴史的仮名遣い	現代仮名遣い			
i	→	i	i → i	シフ → シツ 集執
a	→	a	a → a	ザフ → ザツ 雑
(o	→	o)	(o → o	ホフ → ホツ 法)

歴史的仮名遣いで主母音-i,-aをもつ唇内入声字が促音化する場合には、現代仮名遣いでも-i,-aとなり、元の主母音を保存している。「法」のような、歴史的仮名遣いで主母音-oをもつ唇内入声字も存在するが、こちらも促音化する場合には、元の主母音-oを保存している。

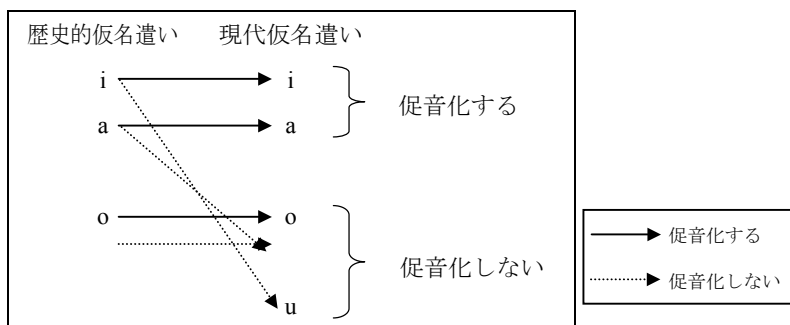
次に、無声子音が後接しても促音化しない場合の主母音を見ると、図6のようになる。

図6 表5より促音化しない場合の主母音



歴史的仮名遣いで主母音-iをもつ唇内入声字が促音化しない場合には、現代仮名遣いでは-uとなり、歴史的仮名遣いで主母音-a,-oをもつ唇内入声字が促音化しない場合には、現代仮名遣いでは-oとなっている。図5と図6をまとめると、図7のようになり、無声子音が後接して促音化する場合と促音化しない場合とが共にある唇内入声字でも、図4の原則と矛盾しない。

図7 表5に掲げた唇内入声字の主母音



以上、唇内入声音の促音化の条件を、前接母音との関係において眺めたが、これに関連して本稿が調査に用いた漢和辞典には注意すべき点がある。

表5の11字のうち、漢和辞典に「ーツ」の形が字音として認められているのは「雑（ザツ）、執（シツ）、拉（ラツ）」の3字のみ、「十（ジュウ・ジツ）」と同じように慣用音として「ーツ」のような促音の形が認められているのは「合（カッ・ガッ）、納（ナッ）、法（ハッ・ホッ）」の3字のみである<sup>7)</sup>。ほかの「恰・甲・集・塔・入」の5字にも「恰好（カッコウ）」「塔頭（タッ



チュウ)」のように漢語の音として実際に「ーッ」の形があるのに、これらの唇内入声字には「ーッ」さえ認められていない。

唇内入声字の促音化についていえば、漢和辞典の字音は漢語の音そのまま反映しているとはいえない。すなわち、ある字については「ーッ」、ある字については「ーッ」、ある字については促音化する漢語があっても「ーッ」「ーッ」のどちらも認めていない。

この11字を1字ごとに見ると、字によって促音化する程度が違うことが明らかである。「甲・集・入・納」は促音化する漢語はごく僅かで、促音化しない漢語のほうが圧倒的に多い。一方、「雑・執」の2字は促音化しない漢語より促音化する漢語のほうが圧倒的に多い。なお、「合」は促音化する漢語と促音化しない漢語が拮抗している。

ちなみに、促音化する漢語が多い「雑・執」の2字は、漢和辞典では「雑（ザツ）、執（シツ）」のように字音として「ーッ」の形が認められている。促音化しない漢語が多い「納・法」や、促音化する漢語と促音化しない漢語が拮抗する「合」に字音として「ーッ」の形が認められているのは、「納豆（ナットウ）」「法華（ホッケ）」「合奏（ガツソウ）」のように、促音化する漢語が日常でよく使われる唇内入声字だからであろう<sup>8)</sup>。一方、「集・塔」など、「集解（シツカイ）」「塔頭（タツチュウ）」のように促音化する漢語があっても、それが日常あまり使用されない唇内入声字は、「ーッ」だけでなく「ーッ」も認められていない。

量的には上述の通りであるが、出現位置について見ると、漢和辞典が字音として「ーッ」の形を認める場合は、漢語の末尾に「ーッ」の音があらわれる漢字であることが注目される。例えば、「ーッ」が字音として認められている「雑・執」には、「混雑（コンザツ）」「確執（カクシツ）」（『角川新字源（改訂版）』より抜粋）というように、「ーッ」となる漢語が存在する。しかし、「ーッ」が字音として認められている「納・法・合」と、「ーッ」「ーッ」のどちらも字音として認められていない「集・塔」においては、末尾が「ーッ」となる漢語は、少なくとも漢和辞典からは窺うことができ

ない。

#### 4. 2. 例外的な字音

最後に、表5で掲げた唇内入声字のうち、例外的なものについて検討する。

まず、「合」の字音について、漢和辞典ではその歴史的仮名遣いの示し方として「ガフ (-a-)」としたり「ゴフ (-o-)」としたりしている。例えば、『角川新字源 (改訂版)』と『学研新漢和大字典』では「ゴフ」は呉音、「ガフ」は慣用音として認めており、『新選漢和辞典 (第七版)』では「ゴフ」は字音として認めておらず、「ガフ」を漢音として認めている。中古音との関係で言えば、「合」は『広韻』では、「答 (タフ)」「沓 (タフ)」…と同じく、歴史的仮名遣いで主母音-a-を持つ唇内入声字と同じ韻目に収録されている。『韻鏡』では、「雑 (ザフ)」「納 (ナフ)」…と同じく、こちらも歴史的仮名遣いで主母音-a-を持つ字と同じ「外転第三十九開」に収録されており、これは「合」が本来開口的な音であったことを示唆している。漢和辞典における「ゴフ (-o-)」は日本字音の慣用であり、「合」は元の母音「ガフ (-a-)」を保存して「合併 (ガッペイ)」「合体 (ガッタイ)」のように促音化したと考えられ、唇内入声字が促音化する場合の原則と矛盾しない。

「法」は、漢和辞典には「ホフ (-o-)」が呉音、「ハフ (-a-)」が漢音、それから促音の形「ホッ (-o-)」「ハッ (-a-)」が慣用音として認められている。原則として、歴史的仮名遣いで主母音-o-を持つ唇内入声字は促音化しないが、「法」の場合は、「法被 (ハッピ)」「法度 (ハット)」のように、「ハフ (-a-)」には促音の形「ハッ (-a-)」があったために、それに誘引されて「ホッ (-o-)」が生まれたと考えられる。

図8 「法」が促音化する場合の主母音

歴史的仮名遣い	現代漢語	
a	→ a	a → a 法被, 法度
o	→ o	o → o 法相, 法華など

「拉」には、漢音として「ロウ（ラフ）」が掲げられており、このほか唐音として「ラ」、慣用音として「ラツ」も掲げられている。「Lhasa」→「拉薩（ラサ）」、「Latin」→「拉丁（ラテン）」のように、音訳として用いる際は、「拉（ラ）」となっている。漢和辞典に収録されている促音化する漢語は「拉致（ラッチ）」「拉薩（ラッサ）」の2つで、いずれも「拉致（ラチ）」「拉薩（ラサ）」のように促音化しない漢語も存在する。これも促音化する場合には元の母音が保存されるという原則と矛盾しない。

## 5. おわりに

唇内入声音が「ーツ」になるのは、無声子音が続いたために促音化が起こり、それが字音として定着したためだと考えられている。しかし、唇内入声音に無声子音が続いても規則的に促音化が起きるわけではない。現代漢語に用いられる頻度が高い約3,000字の調査では、唇内入声字（77字）のうち、無声子音の前で促音化する唇内入声字は僅か9.1%（6字）で、全体の割にも満たない。それに対して、無声子音が後接しても促音化しない唇内入声字（49字）や、促音化したりしなかったりする唇内入声字（11字）のほうが、全体の90.9%となり圧倒的に多い。もちろん、唇内入声音が促音化する場合は無声子音が後接する場合に限られるから、その限りではこれまでの解釈に誤りはないが、唇内入声音は無声子音の前で規則的に促音化するわけではない以上、促音化する条件が問題になる。

それについては、現代漢語に限って見ると、原音の韻類および後接子音との関連は認められないが、一方、促音化を生じる直前の母音との関連は認められた。すなわち、促音化する唇内入声音の主母音は前舌・中舌的な

-i,-e,-a-であるのに対して、促音化しない唇内入声音の主母音は奥舌の非広母音-o,-,u-である。

しかし、歴史的仮名遣いに反映された字音では実態が異なっており、唇内入声音が特定の母音の後で促音化するという事実は認められない。従って、現代漢語における唇内入声音と主母音との相関性は、促音化によって元の母音が保存された結果であると考えられる。

結局、唇内入声音が促音化する音韻論的条件は、明確にすることができない。唇内入声音に無声音が続く場合に、促音化するか否かは各漢字の個別的要因によると結論せざるを得ない。舌内入声音が無声音の前で促音化するか否かには任意性があり、何らかの理由で促音化した漢語あるいは漢語群が、ほかの漢語にも促音化をうながしてきたのではないかと推測される。ただし、ほかの漢語を促音化させた元となる漢語を特定することは難しい。

なお、検証の過程を通じて、辞書の字音の性格、特に辞書の字音と漢語の音との関係も明らかになった。「立」のように「ㄣ」が慣用化しているものには「ㄣ」が字音として認められており、「納」のように慣用化していないものでも促音化した漢語に日常語としての用例があるもの（「納豆」など）には「ㄣ」が認められているが、「塔」のように促音化した漢語があっても日常語としての用例が乏しいもの（「塔頭」など）には「ㄣ」さえ無視されている。出現位置について見ると、漢和辞典が字音として「ㄣ」の形を認める場合は、漢語の末尾に「ㄣ」の音があらわれる漢字（「混雑」など）であることが注目される。

#### <注>

- 1) 唇内入声音に有声音が後接する場合、促音化する例は見られないため、本研究では調査の対象外とする。
- 2) 調査で使用した『新字源』には、表1のほかに「罍・頁・炸・内・汎」の5字が唇内入声字として収録されているが、『広韻』には載せられていないため、調査の対象外とする。

## 現代日本漢語における唇内入声音の促音化について

- 3) 各韻の推定音は有坂・河野の説に従う。河野六郎（1964～67）『朝鮮漢字音の研究』  
なお、緝・葉・業・乏韻の[i]と[i]の下部には[ɿ]、盍韻の[a]の上部には[ʌ]が付される。
- 4) 「十」においては、「十三・十七・十八・十九」のように数詞として用いる場合は促音化しないが、これについては本研究では調査の対象外とする。
- 5) 「時間」として使用する場合、このように読まれる。形容動詞・副詞として使用する場合は「十分（ジュウブン）」と読まれる。
- 6) 促音化する読みと促音化しない読みが共にある漢語には、新旧の差や、意味の違いが認められるものがある。
- 7) 但し『新選漢和辞典（第七版）』には、このほか「甲」も慣用音として「カッ」が認められている。
- 8) 但し「恰好（カッコウ）」は日常よく使うが「ーッ」が認められないのは、あまり漢字が意識されず、口語として「カッコウ」「カッコいい」のようにカタカナが認識されているためだと思われる。

## 引用文献

- 小松英雄（1956）「日本字音における唇内入声音の促音化と舌内入声音への合流過程  
—中世博士家訓点資料からの跡付け—」（『國語學』第25号）  
林 史典（1982）『日本語の世界4（第五章 日本の漢字音）』中央公論社

## 参考資料

- |               |                         |
|---------------|-------------------------|
| 『韻鏡校注』        | 藝文印書館（1982年影印本）         |
| 『学研新漢和大典』     | 学習研究社（2005）（藤堂明保・加納喜光編） |
| 『角川新字源（改訂版）』  | 角川学芸出版（1994）（小川環樹ほか編）   |
| 『校正宋本広韻』      | 藝文印書館（1986年影印本）         |
| 『常用漢字表』       | 平成22年内閣告示第2号（2010）      |
| 『新選漢和辞典（第七版）』 | 小学館（2003）（小林信明編）        |
| 『表外漢字字体表』     | 国語審議会（2000）             |

## <付記>

本稿は聖徳大学の林史典先生の御指導・御教示によるところが大きい。また、  
本学の蔣垂東先生からは貴重なアドバイスを頂いた。ここに記して感謝の微意を  
表したい。